

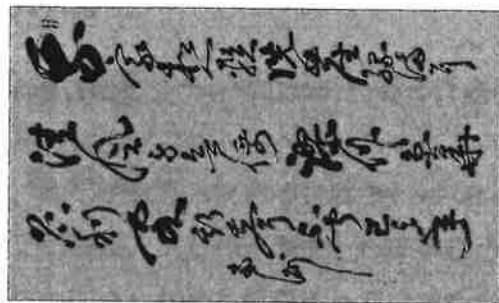
偶 成

我家松籟洗塵縁
滿耳清風身欲僊
謬作京華名利客
斯聲不聞已三年

偶 成

我が家の松籟塵縁を洗い
滿耳の清風身僊ならむと欲す
謬つて京華名利的客と作り
斯の聲聞かざること已に三年

(口語訳) 自分の家の松風の音が塵のうき世の縁を洗い去り、清らかな風が耳一ぱいに吹き入って、すがすがしい気持ちになり、何時の間にか仙人になってしまいそうな気がする。思えば、自分は今まであやまつて都に出て、名譽利益を追う旅の人となり、この松風の音を聞かないことが早三年になる。



(隆)(庄)(全)(薩)

温泉寓居雜吟

温泉寓居雜吟

避暑何邊好
飛泉靜處看
草間蟲早語
樹下夏猶寒
疑是入仙境
清涼忘熱官
悠然斟濁酒
天霽對青巒

暑を避くるは何れの辺か好き
飛泉静けき処より看
草間虫早くも語り
樹下夏猶寒さがごとく
疑うらくは是れ仙境に入るかと
清涼熱官を忘れ
悠然として濁酒を斟み
天霽れて青巒に対す

(口語訳) 暑さを避けるにはどんなあたりが好いであろうか。そこは滝を静かな所から眺め、草むらでは虫が早くも鳴きはじめ、木陰は夏でさえ寒く感じるくらいで、もしかすると仙人が住む所に来たのではあるまいかと思われる。

そんな清々しい涼しさに高位高官の重苦しさを忘れ、ゆつたりと濁り酒「濁れる」を飲んで飲み、晴れわたった空に連なる青い山々を仰ぎ見るのである。

○飛泉||滝。○虫早語||擬人法である。○疑是||疑うことには。勸ちがいます。「是」は強めの助字。○青巒||青々とした山々。○對||向かい合う。ここは「見る」の意。